

日本中国学会便り 2010年(平成22年) 第2号 もくじ

2010年度広島大会を振り返って ——任期終了の挨拶と報告 〈池田知久〉……………〇二	各種委員会報告……………二一 大会委員会(竹村則行)／論文審査委員会(土田健次郎)／ 出版委員会(富永一登)／選挙管理委員会(神塚淑子)
「学会展望」をめぐって ——旧・出版委員会から—— 〈川合康三〉……………〇四	日本中国学会 平成21年(2009)度 収支決算書……………二四
日本中国学会 若手シンポジウムの開催について 〈渡邊義浩〉……………〇八	日本中国学会 平成22年(2010)度 予算書……………二五
東アジア文化交渉学会 〈陶 徳民〉……………〇七	学会展望へのご協力のお願い……………二八
慶應義塾大学附属研究所所道文庫が 50周年を迎えるにあたって 〈高橋 智〉……………一〇	新役員一覧(平成23～24年度)……………二六
中国唐代文学学会に参加して 〈佐藤浩一〉……………一三	平成22年度会員動向……………二七
国際中国語文学学会 第18回年次総会に参加して思うこと 〈竹越美奈子〉……………一五	平成22年度新入会員一覧……………二八
「百年中文」の学会に吹いた“DIY”の新風 ——北京大学中国語文学系主催「活在“現代”的“伝統”: 国際博士研究生及青年学者專題研討会」に参加して 〈成田健太郎〉……………一七	学生会員の会費値下げについて……………二八
金陵瑣言 〈村田みお〉……………一八	事務局からのお知らせ……………三〇
	「国内学会消息」についてのお知らせ……………三一
	「研究会等開催の案内」記事募集……………三一
	科学研究費補助金採択状況の不掲載について……………三一
	「日本中国学会報」論文執筆要領(2010年10月修正)……………三二

# 2010年度広島大会を振り返って——任期終了の挨拶と報告

理事長 池田 知久

## 第62回広島大学大会、成功裏に終わる

日本中国学会の第62回学術大会が、去る10月9日・10日の2日間、東広島市にある広島大学文学部を会場として開かれました。初日の9日には小雨が降り、また酒まつり行事の影響も心配されましたが、2日目の10日は快晴に恵まれ、比較的静かな環境の中で大過なく終了することができました。数字について言えば、大会参加者は380名前後、研究発表者は59名に上り、成功を取めたと行ってよいと思います。

これも大会開催校の代表、野間文史先生を始めとする広島大学の先生方の細心かつ周到なご準備、および学長先生を始めとする大学首脳部の強力なバックアップのお陰と、心よりお礼申しあげます。

今年の大会は、部会構成の点で新しい取り組みを行いました。従来の哲学・思想部会と文学・語学部会以外に、本学会大会史上、初めて「日本漢文」部会を設けて15名の会員に研究発表を行っていただいたことです。これは理事会から発案し、大会委員会・広島大学準備会の賛同を得て進められたものですが、実を言うと、「大会要項」冊子の印刷に至るぎりぎりの直前まで、発表者と司会者の人選・依頼、発表要旨の執筆依頼・編集等々、ウラで懸命の努力が積み重ねられました。最もご苦勞にあずかったのは、野間文史先生を始めとする広島大学の先生方です。それと同時に、この新しい試みを成功させようと、多くの会員が善意のご協力を下さったことも、忘れるわけにはいきません。以上のすべての方々に対して、改めて心よりお礼申しあげたいと思います。

「日本漢文」の試みは、部会での発表・司会も充実しており、参加者も少なくなかったのも、まずまずの成功だったのではないのでしょうか。その基盤としては、「日本漢文」に対する本学会会員の、相当に幅広くかつ根強い関心があるように感じられます。しかし、来年の九州大学大会以降、引き続きこの部会を設置するか否かについては、今大会の総括の上に立って、さらに議論を煮詰める必要があります。

なお、今大会開催の半年ほど前から、全国漢文教

育学会と和漢比較文学会の会員に対して、本学会への入会勧誘を呼びかける取り組みを行ってきました。その結果、全国漢文教育学会から12名、和漢比較文学会から13名、合計25名の新入会員を迎えることができました。「日本漢文」部会の設置は、これらの方々と話し合いに基づいて、理事会が、本学会の学術大会などに新しい研究領域として「日本漢文」を試みてみたいと判断したためでもあります。

## 学生会員の会費値下げ決まる

今大会の前日に開かれた評議員会（10月8日）で、学生会員の会費値下げが決まりました。その「学生」の定義は、「大学・大学院・研究機関等に正規学生として在籍しているもの」となっています。新しい会費は4,000円（3,000円の値下げ）、2011年4月より実施されます。これは1年前から理事会で検討していた案件ではありますが、今年6月の理事会で原案を合意し、10月の理事会で再確認した後、上記の評議員会に「会則改正」を上程して満場一致で決まったものであります。

上記の「学生」の条件に合致する会員のみなさんは、2011年度以降の会費が4,000円になりますので（2010年度以前の会費は従来どおり7,000円）、振り込みの際、注意して下さい。また、会員のみなさんにはこの機会をとらえて、周囲の中国文化の研究に従事している学生の方々に呼びかけ、多数、本学会に入会されるよう勧誘していただければ幸いです。

## 若手シンポジウムの開催

本学会史上、初めての「若手シンポジウム」が開かれることになりました。その詳細については、本学会のホームページおよび本『便り』を参照。これは2年ほど前から理事会で検討してきた案件でありまして、若手・中堅研究者の研究の一層の活性化を図ろうとして試みる方策の一つであります。

共通テーマは「中国学の新局面」、2011年3月26日（土）午前10時～午後5時、二松学舎大学九段

校舎3号館において開かれます。課程博士論文執筆中もしくは執筆後3年以内の若手中国研究者（本学会員）が、中国の思想・文学・語学・日本漢学・史学などについて、時代ごとの部会に分かれて報告した後、フロアーの出席者と一緒になって討論を行うシンポジウムであります。すでに38名の報告者が決まっており、その内、審査を経て優れたもの26篇を選び、2011年度中に『日本中国学会報』別冊に掲載・発行する予定で準備を進めています。

なお、参加者は50歳以下の者とされています。周囲の方々と誘いあって多数ご出席下さい（非会員も出席できます）。

### 『日本学者論中国哲学史』

#### （『学会報』受賞論文集、哲学部門）の出版

この件については、今年4月20日の『便り』に、最終段階の詳細な報告記事が掲載されていますので、それをも参照して下さい。これは本学会の中国研究、ひいては現代日本の中国研究を、積極的に世界に向かって発信していこうという試みの、ささやかな具体的現れの一つではありますが、本学会と中国の上海師範大学との連携によって、『日本中国学会報』受賞論文集（思想・哲学部門）を中国において中国語で出版する、という計画であります。今年4月20日の『便り』の原稿を執筆していた時点では、近々5月中にも出版されるという予定を聞かされていたのですが、その後、主として出版社サイドの事情により延び延びになっていたものであります。

9月中旬になって上海師範大学方旭東教授より、本書の表紙と奥付が到着。それによれば、書名は『日本学者論中国哲学史』、主編は方旭東教授、出版社は華東師範大学出版社、B5判、36万5千字、2010年10月第1版出版、印刷数は第1版が5100部、定価39.80元、などとなっています。22名の著者には、抜き刷りはないが、献本が1名につき2冊、日本中国学会に献本5冊、翻訳者にも献本があると聞いています。会員のみなさんの中に、本書を購入したいというご希望がありましたら、本学会事務局にメール・ファックス・はがきなどでお問い合わせ下さい。

思い返してみれば、計画の発端は2008年3月であり、約2年半の時間を費やして何とか出版にこぎ着けたこととなります。これを計画また担当した者として、ほっと胸を撫で下ろしていますが、同時に

著者・訳者を始めとする多くの方々に心から感謝したいと思います。

#### 最後のご挨拶

2007年度から2期4年間、理事長の大任を仰せつかり、2011年3月をもって任期終了を迎えようとしています。この時期は、何度も強調してきたように、日本と世界の中国研究、東洋学・アジア研究、ひいては人文学が、極めて困難な状況に置かれている時期でありました。そして、こうした状況は当分の間、大きな改善の見通しはないと見なければなりません。次期の理事長川合康三先生、および次期の理事各位には、その対策のために色々とご奮闘いただきたいと期待しています。

2008年10月の京都大学大会の際、私は再選された理事長としてご挨拶を申しあげた中で、今日の中国研究の逆境に向かって、会員のみなさんと一致協力して何とか対処していきたいという趣旨のことをお話ししました。その時、実行可能な具体的テーマとして挙げたものは、次の3点でありました。——(1) 電子化をさらに推進することなどによって、本学会理事会・事務局と会員のみなさんとの間を結ぶ諸媒体（『日本中国学会報』・『日本中国学会便り』・ホームページ）を、会員にとってより親近なものにすること。(2) 学生・院生・助教などの次世代あるいは若手研究者を多数、本学会に新入会員として迎え入れ、その若々しいエネルギーと意欲を汲み出し、それをバネにして日本の中国研究の一層の活性化を図ること。(3) 近年の日本の中国研究はかつて有していた国際的影響力を失いつつあるが、本学会から積極的に世界に向かって発信し、過去のそれを回復していくことを通じて、世界の中国研究のレベルアップに貢献すること。

公約やマニフェストではありませんし、また大風呂敷を掲げすぎた嫌いがありますが、それぞれの点をわずかながら前に進めることができたのではないのでしょうか。その背景には、この4年間、理事会が、上述のような中国研究、東洋学・アジア研究、人文学についての危機感を共有しており、内部に大きな対立もなくよくまとまっていたことがあったと思います。会員のみなさん、理事・評議員のみなさん、4年間、ありがとうございました。

(2010年10月23日 擱筆)

## 「学界展望」をめぐって——旧・出版委員会から——

副理事長 川合 康三

『日本中国学会報』第六十二集の「学界展望 哲学」を読まれた会員の方々は、きっと仰天されたことでしょう。ひょっとすると今年の「展望」ほど多くの読者を獲得したことは、今までに例がないかも知れません。そこに頻繁に登場する「川合」某、嫌がる池田秀三さんを無理矢理ねじ伏せた、血も涙もない酷吏みたいです。わたし自身は池田さんが「展望」担当をかくも厭っておられたとは、この文を読むまで気がませんでした。なにしろ彼とは教授会の席はいつも隣同士、頭を寄せ合って居眠りしている仲なのです。これほどに嫌がっていたとも知らずに押しつけ苦しめたことは、とても申し訳なく思います。

結果は無理強いしたことになりますが、わたしとしては実は池田さんにこそぜひとも書いていただきたかったのです。というのは「展望」にコメントが復活して以後、それに異議を唱えていたのは、わたしの知る限り、池田さんお一人だったからです。なぜ無意味なのか、学界を展望することが含む本質的な問題、それが学の営みをどのように損なう行為なのか、池田さんならではの持論を開陳していただけると期待したのです。

興膳宏・前理事長がコメント復活を提起された時、わたしと富永一登さんは出版委員会としてそれを引き受け、以後、丸尾常喜理事長、池田知久理事長の期間もそのまま続いて、わたしは二年前まで、富永さんは現在に至るまで、担当してきました。当時、興膳理事長はこの学会に次々と清新な改革をもたらしましたが、「学界展望」が文献目録の掲載に終わらず、文章化したものを添えるというのも画期的な試みの一つでした。なにか学会全体がハツラツとなっていく昂揚感のなかで、わたしたちも張り切ってこの新しい企画に取り組みました。

とはいっても「展望」文章化は、今までになかった無理難題をいきなり理事長が持ち出したということではありません。「展望」を本来のかたちに戻そ

うというに過ぎないのです。それは至極当然な考えですから、理事会の場で疑義も反対もまったく出ませんでした（ちなみに当時、池田さんは理事に入っておられませんでした）。文章としてまとめておくことによって現在の研究状況を将来から振り返る手立てにする、それが目的の一つだったでしょうが、将来とはいわず、今現在でも毎年出現する膨大な著作、論文を手際よく整理、解説してくれたらぜひぶん助かる、そんな思いもありました。

ただ具体的な方法については、興膳理事長と多少のずれがあったかも知れません。理事長は担当校がふさわしい人に「外注」することをお考えのようでした。「時代・分野を勘案した数人に「展望」執筆者を委嘱して、毎年の研究動向を文章化してもらってはどうか」（『中国研究この五十年——文学』、『日本中国学会五十年史』、一九九八年、『中国古典と現代』研文出版、二〇〇八年、所収）とあるのがそれに当たります。もしそのようなかたちで実行に移されていたら、或いは池田さんが憤慨されるような事態は免れていたかも知れません。しかしわたし個人は外注案には違和感、ないし危惧を抱きました。適任と思われる方に執筆を依頼することになれば、おそらく決まった顔ぶれが毎年ずっと書き続けることになるでしょう。その方々の過重な負担もさることながら、分野ごとに或る特定の人たちが毎年評定する、取り仕切ることになってしまいます。それは危険ではなからうか、と案ずるのは杞憂としても、少なくとも健全なこととは思われませんし、取り上げられる執筆者、取り上げられない執筆者、いずれにとってもあまり愉快なことではありません。

結局、学界展望担当校の責任者にコメントの執筆もお願いすることになりました。これによって執筆者は二年ごとに代わることになります。わたしとしては二年交替、特定の人に偏らない、これがとって大事なのだと考えています。担当校は学会活動のほかの業務と同じく、各大学に順繰りにお願いして

いるわけですが、文献目録作成には大学院生の手に頼るほかに、したがって専門の院生を抱えている研究室には、負担をかけてしまっています。

担当をお願いする際、どなたにも「お好きなように書いてください」ということをまず申しました。とは言っても、任せられた方としてはなかなか「好きなように」書けるものではないでしょう。担当者が交替することによる変化を期待しても、実際には前の担当者のスタイルを意識し、型が踏襲されていきがちなこと、やむをえないかも知れません。それでもわたしは担当の交替、スタイルの多様さにこだわりたいと思います。と申しますのは、近年あちこちで歎かれる中国学の衰退、低迷、そういう事態に陥っている理由の少なくとも一つは中国学の内部にあるのではないかと。学としての体系が早い時期に成立してしまった。その確固たる体系に頼ってしまう、安住してしまう。それに固執する限り、この先新たに切り開いていくことはむずかしい。つまり簡単に言ってしまうと、わたしたちはあらゆる面での権威主義を放棄すべきだと思うのです。それでこそ新たな命が芽生える可能性があるはず。そこで「学界展望」も少数の「権威ある」人たちに任せず、目まぐるしく交替する、それぞれ好きなスタイルで書いていただく、そこに活路を見出せないだろうかというのが、わたしの期待です。

変化は二年単位に限りません。たとえば「文学」展望の六十一集は全体を漏れなく紹介することに気配りされていますが、六十二集では一転、中国の文学を盛唐・中唐を境に二つに分け、多様化をもたらされる後半に属する数冊の研究書に絞って記述、且つ近現代文学は院生に任せて自由に筆を走らせるという離れ業、二年のなかで二つのスタイルを見事に書き分けています。

ところで、池田さんの文章のなかに「したがって基本的には誉めてある」とか、「結局は全て曖昧な誉め方をしておくほかに道はない」など、「誉める」という言葉が出てきます。確かに「展望」は評価と極めて近接した関係にあります。しかしながら、「学界展望」は成績評価ではないのです。「あっぱれ!」とか「喝!」とか言う場ではないはず。実際には評価を削ぎ落として展望することはむずかしいでしょうが、両者は違うのだということを意識するだ

けで、内容はずいぶん変わってくるのではないのでしょうか。ついでに言えば、日本の中国学がいまだに未熟なのは書評の領域でしょう。これも日本では書評が簡単な紹介か美刺判断かのいずれかに偏ってしまうため、展望の弊と同じです。書評や紹介を即、点数をつけることだとする思い込みから脱却せねばなりません。よいか悪いか判断できない、或いはそんな判断はそもそもしない、しかしこんなおもしろい考え方がある、それこそが展望の役割ではないかと思っています。「権威ある」人による交通整理より、多くの人の敏感な触角で潜在する可能性を察知してほしいと思います。

池田さんは専門分野において「私の評価はある程度の影響力があると自認している」、それゆえ軽々な判断はできない、とのこと。しかし若い研究者にはそんな「影響力」をものともしない、吹っ飛ばしてしまう気概がほしい。長老にはご自身の「影響力」に安住しないしなやかさがほしい。老若それぞれの仕方での閉塞した状況を打ち破ろうではありませんか。

また池田さんは展望のコメントについて「本来期待されたものになっている」とは「思えない」、「出版社の宣伝文を大きく超えるものではない」と言われています。ご自身の求める所に合致しなかったということなのでしょうが、これまでの「展望」の内容を理解していただけなかったことには、悲しくなってしまう。わたしなどはずいぶん重宝いたしました。担当された方々、ほんとうにありがとうございました。二年交替の当番制でなら問題ないことが証されたと思うのですが、とはいえもっとよい方法があるのでしたら、ぜひとも御提言ください。より多くの会員の方々に有用な「展望」を目指して模索して行きましょう。

# 日本中国学会若手シンポジウムの開催について

若手シンポジウム実施委員会委員長 渡邊 義浩

日本中国学会では、中長期的展望に立って、若手研究者の学会活動への参加促進をはかり、日本中国学会全体の研究活動の活性化を目指して、「中国学の新局面」をテーマとして、下記の要領により若手シンポジウムを開催いたします。本シンポジウムは、通常の大会以上に、若手・中間の積極的な討論の中から互いに啓発しあうことを目的とするため、参加者は50歳以下にすると共に、報告者を除き非会員も参加可能としております。

## 記

### 1. 日時・会場

- ・2011年3月26日（土）午前9時から午後6時まで
- ・二松学舎大学九段校舎三号館

### 2. 報告者・報告時間・部会

- ・報告者は、応募の時点で本学会会員（2010年9月末までに入会を申し込み、2010年10月の理事会において承認された者を含む）であり、原則として、課程博士論文を執筆中、あるいは執筆後3年以内の若手であることを条件に、ホームページで告知して公募をいたしました。申し込み者に対して、若手シンポジウム実施委員会で審査・投票を行いました結果、38名の報告者を立てることになりました。38名の氏名・報告題目・要旨、それぞれの報告の司会者・コメンテーターにつきましては、2010年12月末までに日本中国学会のホームページ上に掲載いたします。
- ・報告20分、コメント5分、討論15分とします。
- ・第一部会（先秦～唐の中国哲学・中国文学）、第二部会（宋～清の中国哲学・中国文学）、第三部会（近現代の中国哲学・中国文学）、第四部会（史学・日本漢学）の四部会を設けます。

### 3. 成果の公開

- ・報告は、論文審査を経て、優れたものを報告書『日本中国学会報』別冊一（2011年12月刊行予定）に収録いたします。執筆要項は、電子媒体として配布することの許諾を含めまして、原則として『日本中国学会報』の執筆要項に従います。

### 若手シンポジウム実施委員会委員

（敬称略。若干名の追加を予定しております）

秋吉 收	井川 義次	伊藤晋太郎
大西 克也	大東 和重	小川 利康
垣内 景子	木津 祐子	桑島 道夫
小島 毅	近藤 浩之	佐藤 正光
齋藤 希史	静永 健	清水賢一郎
辛 賢	鈴木 将久	瀧 康秀
竹越 孝	長尾 直茂	中島 隆博
名和 敏光	二階堂善弘	西村 正男
西山 尚志	橋本 敬司	星野 幸代
町 泉寿郎	松浦 恆雄	松江 崇
水口 拓寿	宮本 徹	森 由利亜
横手 裕		



# 東アジア文化交渉学会

関西大学 陶 徳民

東アジア文化交渉学会 (Society for Culture Interaction in East Asia; 略称 SCIEA) は、平成19年文部科学省G-COEプログラムに採択された関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) が姉妹機関の協力を得て立ち上げた学術組織である。ICIS開所式で、人文学のノーベル賞というべきJ. クルゲ賞の2006年度受賞者である余英時プリンストン大学名誉教授が基調講演において「文化交渉学」の構築および関連研究の推進を目的とする学会の設立について、大変意義あるものだと励ましてくださった。開所式に参列された各研究機関の方々からもわたしたちの提案に対する賛意を賜りました。その後、関係者は共催シンポジウムの機会を利用して学会設立に関する議論を重ね、ついに次のようなコンセンサスを得るに至った。

本学会は、東アジアでの文化生成・接触・衝突・変容・融合等の諸現象を動的に把握し、トータルな文化交渉のあり方を人文学の多様な方法を総合して複眼的な見地から解明するため、会員相互の研究上の連絡と交流を図ることを目的とする組織である。具体的には、

(一) 研究の面において、グローバル的視野をもつ創造的な研究活動を目指し、研究の対象を「東アジアでの文化交渉」と設定しているが、それは「東アジアでの東西文化交渉」と「東アジア諸地域間の文化交渉」の両方を含むものであると考えている。そして、そのような文化交渉の実態を二国間・二地域間という「一対一」の視点というより、できるだけ多国間・多地域間という「多対多」の視点を生かして分析する。上記の目的を達成するために、学会活動は、年次大会を開き研究成果を交流すると共に、方法論の検討とリソースのシェアを促進することに重点を置くべきだと考えている。また年次大会は、輪番制で異なる国・地域において開催し、現地の声と主張に耳を傾けることにする。

(二) 組織の面において、アメリカのアジア学会

(Association for Asian Studies) や日本の関連学会の長所を取り込む、よりオープンでアクティブな運営を目指す。会則にあるように理事会、評議員会を中心に学会運営を行うと同時に、英語の学会誌 (Journal of Cultural Interaction in East Asia) を編集する編集部および編集顧問委員会も立ち上げる。会長は年次大会開催校の研究機関の長が、副会長は次期年次大会の開催予定校の研究機関の長がそれぞれ担任し、任期は1年とする。なお、学会の日常業務および学会誌の編集業務を担当する事務局を向こう3年間関西大学に置くものとし、業務を統括する常任副会長はICISサブリーダーの内田慶市氏が、事務局長はICISメンバーの沈国威氏がそれぞれ担任する。

既存のネットワークを活用し、22カ国・地域から238名の創始会員を募集し、役員就任内諾 (評議員50名、その中の20名は理事を兼務) を得ることなど準備が整えたのち、2009年6月27日 (土) に、関西大学100周年記念会館においてSCIEAの創立総会及び「多元文化交渉への新しいアプローチ」を



会長交代の記念写真：左より 馬 敏、黄俊傑、陶 徳民

テーマとする第1回年次大会が参加者150名に及ぶ大盛況のうちに開催された。

午前中の創立総会では、学会の規約と運営に関する議題が提案され、満場一致で承認を受けた後、初代会長の陶徳民（関西大学ICISリーダー）氏により学会設立が宣言された。平野健一郎（東京大学名誉教授）、土田健次郎（早稲田大学副総長）、小島毅（東京大学准教授）、鄭培凱（香港城市大学中国文化中心主任）、崔官（高麗大学校日本研究センター所長）、グエン・ツァオ・ファン（ヴェトナム国家大学科学技術大学院院長）、ルドルフ・G・ワグナー（ハイデルベルク大学中国学研究所教授）各氏による祝辞に続き、河田悌一学長による司会のもとで、青木保（文化庁長官）氏の「現代東アジア文化圏の形成と学術文化交流」と題する記念講演が行われた。次いで、黄俊傑（国立台湾大学人文社会高等研究院院長）、朱英（華中師範大学中国近代史研究所所長）両氏が、2010年度と2011年度の年次大会の開催予定について紹介した。その後、ハーバード燕京図書館と関西大学図書館の学術交流協定調印式、入江昭（ハーバード大学名誉教授）、M. Colclutt（プリンストン大学教授）両氏に対する名誉博士号授与式などが行われた。

午後の第1回年次大会では、副会長の黄俊傑氏による基調講演「Some Observations on the Study of the History of Cultural Interactions in East Asia」が行われたあと、馬小鶴氏（ハーバード燕京図書館・中文部研究館員兼主任）は同図書館の歴史を、陶徳民氏は関西大学図書館内藤湖南文庫に所蔵されている清人書画をそれぞれPPTで紹介した。続い



学会創立記念写真

て、言語文化・歴史環境・思想宗教、日本文化研究およびフィールドとしての周縁をめぐる5つのラウンド・テーブルにおいて、各5名の研究者による報告がなされ、各2名のコメンテーターを交えて白熱した討議が交わされた。Federico Masini（サピエンツァ・ローマ大学）、Willy Vande Walle（ルーヴェン・カトリック大学）、厳紹盪（北京大学）、張西平（北京外国語大学）、周振鶴（復旦大学）、葛兆光（復旦大学）、黄一農（台湾・国立清華大学）、河宇鳳（全北大学校）、崔溶澈（高麗大学校）、李焯然（シンガポール国立大学）など外国からのパネリストの活躍ぶりが目立った。

「東アジア文化の交流とインタラクション」をテーマとする第2回年次大会は、2010年5月7-8日台湾大学において人文社会高等研究院と文学院の共催のもとで開かれた。初日の午前中は開幕式のあと、台湾国立政治大学客員教授の張広達氏とヨーク大学教授のJ. フォーゲル氏による基調講演があり、テーマはそれぞれ「東アジアの文化交渉について」と“The Aftermath of a Material Object: The Mysterious Gold Seal of 57 C.E.”（漢倭奴国王印の運命）であった。つづいて開かれた第二回総会では、開催校の黄俊傑院長と次期開催校の馬敏・華中師範大学学長がそれぞれ新しい会長と副会長に選出され、当選会長の就任演説が行われた。午後、“Cultural Interactions between languages and Literatures”と“Changing Perceptions and Images of East Asia”をテーマとする2つのラウンド・テーブル討論が黄俊傑と徐興慶氏の司会のもとで順次行われた。

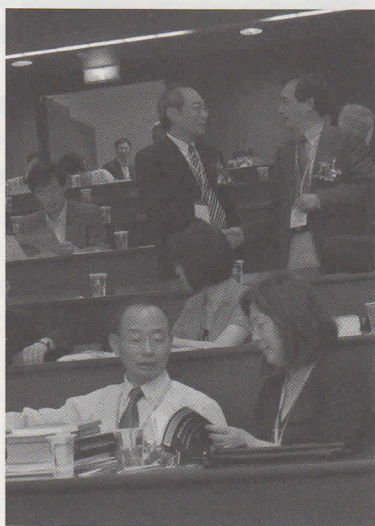
翌日の午前は、まず陶徳民氏の「有感於日本人の曲阜朝聖一兼及“多元文化認同”和“文化基因”説」と題する講演、およびドイツのJörn Rüsen氏の“Basic Issues of Cultural Interactions: A European Perspective concerning Historical Identity”と題する講演が行われた。その後、100分にわたる分科会が、午前中に5つ、午後のコーヒー・ブレイクの前後にそれぞれ5つが同時に開かれたが、そのうちの12の分科会はパネルセッションで、残りの3つは個人発表のセッションであった。パネルのテーマとして、たとえば“Dogen’s Transformation from Chan to Zen,” “Ito Jinsai’s Transformation/Restoration



of the Four Books,”「漢字文化圏的近代關鍵詞」、  
「文化交流—東亜与西方的対話」、「日本文学与中国  
文学的交渉」、「近代日韓文学の中の文化交渉」、「近  
世日本の儒教文化—懷徳堂を中心として」、「近代中  
日関係的多重脈絡」など興味深いものがあった。

第3回年次大会は2011年5月7-8日、武漢に位  
置する華中師範大学において「辛亥革命100年の歴史  
遺産」というメイン・テーマで開かれる予定だが、  
中国近代史を専門としない会員には各自の分野でパ  
ネルを組むか、あるいは個人発表をするかという選  
択の自由も確保されている。会議のあと、近年の調  
査で戦国時代の馬車が発掘された熊家塚大型楚墓を  
含む荊州の古墓群の見学も予定されている。なお、  
第4回年次大会は2012年5月高麗大学、第5回年次  
大会は2013年5月香港城市大学、第6回年次大会は  
2014年5月カナダのBritish Columbia Universityに  
おいて開催される予定である。

本学会のホームページ<http://www.sciea.org/>には日  
本語と英語のサイトがあり、学会規約（日・中・韓・  
英の4バージョン）、役員・会員（現在、約300名）  
の名簿、入会案内、年次大会の紹介および会誌創刊  
号などが載っている。



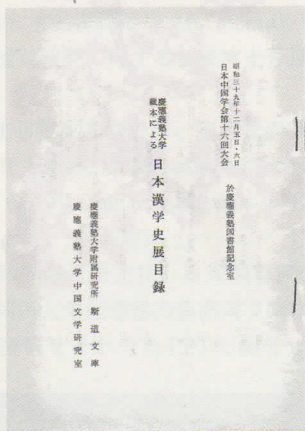
第2回年次大会会場風景



# 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫が50周年を迎えるにあたって

慶應義塾大学 高橋 智

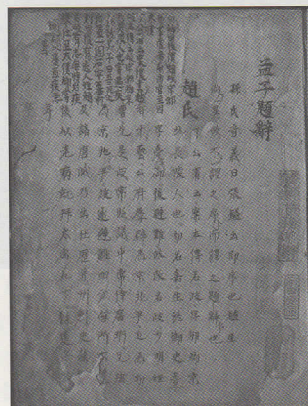
日本中国学会と斯道文庫との関係は、今から46年前、昭和39年12月に行われた第16回大会に遡る。東京オリンピックの熱気もようやく落ち着いた、12月5日・6日の両日、慶應義塾大学で開催された大会に於いて、「日本漢学史展」が行われたのである。この時に、斯道文庫は中国文学研究室と共同で、慶應義塾大学蔵本を用い、小さな展示室に日本漢学の歴史を披露した。第1部漢籍古鈔本類、第2部室町以前漢詩文集・抄物類、第3部近世、という構成であった。日本の漢学といえば近世、あまり中世以前の漢学研究が旺盛ではなかった頃である。当時、中国文学科は奥野信太郎先生、斯道文庫は阿部隆一先生が中心となっておられた。



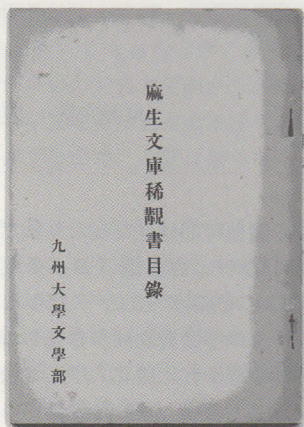
日本漢学史展の展示目録

折しも、昭和33年、慶應義塾100周年を記念して、東洋文化の研究所である旧財団法人斯道文庫の蔵書7万冊が、慶應義塾に寄贈され、同35年にその蔵書を基に大学附属研究所斯道文庫が設立されたばかりであった。そもそも、財団法人斯道文庫は、昭和13年に麻生太賀吉氏により福岡に創設されたもので、精神文化研究を主とする研究機関であった。当初の蒐書活動は目覚ましいものがあり、国学者橘守

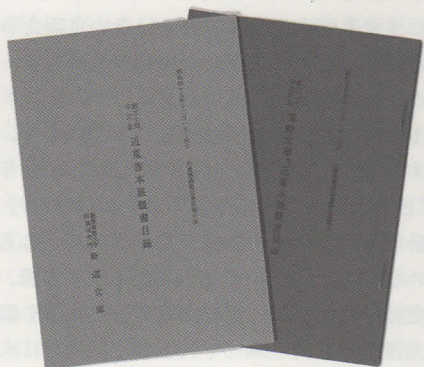
部(1781～1849)の稿本・手沢本240冊、漢学者安井息軒(1788～1876)、安井朴堂(1858～1938)の稿本・手沢本7400冊、漢学者浜野穆軒(1879～1941)の旧蔵書15,000冊など、とりわけ日本漢学研究にとって必要な資料が整備されていった。浜野文庫には、息軒の師松崎傑堂(1770～1844)の稿本・手沢本が多数含まれ、幕末の漢学を代表する師弟の学問が一堂に会していた。こうした蔵書は、戦後、解散を余儀なくされた財団の遺物として、麻生文庫と名付けられ、九州大学文学部に寄託され、『麻生文庫稀覯書目録』(阿部隆一編)が出版された。そして、7年の寄託期間満了に伴い、慶應義塾大学に移送されたものであった。慶應にあつて、研究所設立以降は、阿部教授を中心として、室町以前の日本漢学資料を研究題目の一つに掲げ、A邦人撰述漢詩文集類、B邦人撰述漢籍注釈書類、C日本現存漢籍古写本の総合的研究を具体的課題として取り組んでいた。従つて、漢籍古鈔本・漢籍注釈書類の購入調査は活発で、また、全国各地の文庫図書館・寺院・個人を訪ね、マイクロフィルムによる自己撮影をいち早く導入し、複本の作製と校勘作業に徹していた。従つて、「日本漢学史展」は、当時最も意を得た展示であったことが伺われるのである。



日本漢学史展に展示された  
室町時代初期の古鈔本趙岐注孟子



麻生文庫稀覯書目録



斯道文庫10周年・20周年の記念展示目録

奇しき縁で、本年、広島大学で行われた第62回大会では、部会の一つに日本漢文が加えられ、慶應からは文学部の佐藤道生氏が「平安時代に於ける『文選集注』の受容」、斯道文庫から住吉朋彦氏が「『千家詩選』と『新選集』一周防国清寺旧蔵本をめぐって」と題して研究発表を行った。日本の漢学を研究しようという試みは、今や、着実な資料調査のもとに、受容流通や本文研究など広い学術研究の枠組みを摸索してグローバル化の方向に突き進んでいる。中国の学界に於いても日本漢学に向ける関心はますます高まり、早くに、金沢大学・復旦大学の李慶先生が『日本漢学史』を中国で出版しておられるが、現在、北京大学では、袁行霈先生を中心とした、海外漢学研究中心という巨大なセンターが実動し、交流・研究が開始されている。その内、日本漢学部門の占める割合が大であることは言うまで

もなく、既に、短期の流動研究員として住吉氏が赴き、現在、長期の流動研究員として京大人文研の高田時雄先生が赴任しておられる。中国の関心の範囲はもはや、古代日本から中世、近世、近代の漢文の歴史に止まらず、現代の日本に於ける中国研究にまで及んでいる。佐藤道生氏等により、大型の解題影印「日本漢学集成」の計画も中国からの出版準備が進んでいるという。日本の資料が多く中国で紹介されれば、かつての作者たちの中国への情熱も、再び息を吹き返す時がくるのではないだろうか。こうした時期にこうした潮流に出会うのは、まことに意義深いことと感じられるのである。

斯道文庫は日本の漢学や国学の研究を中心に行ってきたが、阿部隆一先生が、「漢籍総目録の編纂」という事業を打ち立てて以来、原資料の忠実な調査を目指す基礎学問としての書誌学の実践に、特に力を注いできた。それ故に、11月29日から12月4日まで、50周年の記念事業の一環として、住吉氏の斬新な企画による「書誌学展」を慶應義塾図書館にて開催することとなり、また展示図録『書誌学参考図録』も出版される。今回の展示は一般の方々にも見ていただけるようなテーマ展示としたが、国書・漢籍、これを融合して書物の世界を語るのは容易なことではない。内容・形、様々な変容を遂げて行く書物の歴史を幾つかの視点で眺めていただくことによって、書誌学という地味な学問をより多くの方たちに理解していただければ幸いと考えている。更には、中国の文献学を正しく学び、日本の書誌学を中国に伝えていく架け橋の一端ともなればと念じている。日本中国学会との奇しき縁を大切にしたい。



# 中国唐代文学学会に参加して

東海大学 佐藤 浩一

2010年10月16日から19日にかけて、「中国唐代文学学会第15届年会暨（および）唐代文学国際學術研討会」が天津市の南開大学にて行われた。国内外の研究者142名が集まり、日本からは、戸崎哲彦（島根大学）・道坂昭廣（京都大学）・諸田龍美（愛媛大学）・長谷部剛（関西大学）・陳翀（九州大学）・鄧芳（関西学院大学）、および私の計7名が参加した（他に、東京学芸大学の佐藤正光氏も招待されたが、都合により論文を寄せるだけの参加となった）。

## 唐代文学会とは

唐代文学会は、中国政府が正式に承認する、古典文学の学会である。他にも国家レベルの古典学会としては、李白学会や紅樓夢学会や古代文学論学会などもあるが、唐代文学会は成立がやや早く、国内でも一定の影響力を有している。1990年以降、中国政府は新しい学会の成立をほとんど承認しなくなり、1994年に國務院直属の中国社会科学院が古代文学学会を作ろうとしたときさえも、なかなか承認されず、しかも唐代文学会の下位に属されそうになった。他にも各時代の文学に特化した学会といえは、宋代文学会や明代文学会の名前が想起されるけれども、やはり民政部の認可を得るに到っておらず、学会の正式名称に「(筹)」すなわち「準備中」という一文字が附いたままである。

唐代文学会の会長は、永く中華書局の傅璇琮氏が務めてきたが、安徽師範大学で行われた前大会で、新たに復旦大学の陳尚君氏が会長に選出された。陳尚君教授は日本で在外研究をされた時期もあるので、馴染みの方も多いことだろう。

## 参加希望者は

大会は隔年で実施されており、今回で15回目を数える。発表原稿の多くが論文集『唐代文学研究』にも掲載され、毎年刊行される『唐代文学研究年鑑』とともに、唐代文学会の顔として広く知られて

いる。大会の開催時期は夏だったり秋だったり、特に一定していない。会員数はおよそ600名あまりで、大会には、そのうち120～150人くらいが参加する。かつては年会費制度が存在したが今は無くなり、事務局が置かれた西北大学と大会主催校の予算、および大会参加費（600元前後）によって運営されている。大会参加費は、国内と海外の参加者で異なる時期もあったが、現在は一律の金額になっている。すこし前なら決して安くない金額だったかもしれない。すでに向上した中国の経済力を、こんなところにも垣間見る思いがする。

日本からは、招待されてのみの参加となり、誰を招待するかは、理事会と主催校が選定しているらしい。「日本人は自分からは参加できないのか?」と陳尚君会長に質問したところ、「たくさん来られると大変なので、難しい。」という回答だった。実際、中国の学会は、会期中、主催校がホテルや食事や観光等ほぼ丸抱えで面倒をみてくれるので、確かに大挙して押し寄せられたら、負担となるだろうことは理解できる。ただし陳尚君会長が了解さえしていれば大丈夫だそうなので、次回以降で参加を希望される方は、陳会長に問い合わせることは如何だろう（郵編200433上海市邯鄲路220号 復旦大学中文系）。

## 会場入り

大会は前日より受け付けが開始される。しかしその日は勤務校でペアの語学授業があり、しかも教授会まで重なったので、大会当日に会場入りすることにした。幸い場所が近場の天津だったこともあり、朝一番の飛行機で北京に入り、新幹線「和諧号」で駆けつけたら、午後の分科会に辛くも間に合った。かつては3時間かかったという天津に、わずか30分ほどで到着してしまい、驚いた。「和諧号」は時速320キロくらいで走り続けていた。最高300キロに制限する日本の新幹線技術者が見たら青ざめるかもしれない。

ところで学会によっては、大学関係者が駅まで送迎してくれるケースもあろうが、唐代文学学会の場合、参加者が多いので自力で向かうのが一般的のようだ。ただし不安な人は送迎を希望すれば、対応してもらえないはずなので、心配は要らないと思う。

### いざ発表

前もって遅れることを主催校の盧盛江教授にメールで伝えておいたので、私の発表は大会初日ではなく、2日目に設定してもらえていた。参加者は4つの分科会に分配されて、更にその分科会内で6人一組の小グループに分けられ、1人およそ10分の持ち時間で発表する。たいいていの人々がレジメやパワーポイントを用意する日本の学会とはやや異なり、中国の学会は完全原稿を用意し、その一部分を読んでゆくスタイルが一般的である。ゆえに、わずか10分ほどの発表であっても、その人の原稿を読みさえすれば概ね内容を理解できるので支障はない。むしろ聴き取りに難のある外国人にとっては、この形式のほうがかえって有り難い。発表後は、5分ほどの質疑応答が入る。ここで静まりかえることはほとんど無く、必ず誰かしら発言する人がいる。単に原稿を読み上げるだけで終わらず、そうした積極的な質疑応答によって活性化されるので、中国の学会は、参加の意義が保たれる側面もあるのかもしれない。

### さすがに緊張

今回は発表だけでなく、小グループの司会と、閉会式のスピーチ役も回ってきた。小グループの司会については、あらかじめ事務局が発表者の原稿をメールで届けてくれていたので、事前の予習には事欠かなかった。閉会式のスピーチについても、あらかじめ事務局がテーマを伝えてくれるので、それほど慌てずに済む。ただし今回については慌てることになったが。

休講を最小限に抑えるために早めの帰国を予定した私は、遅く来て早めに去る、という日程を事務局に伝えた。それを受けて事務局は、閉会式の時点で私は去っていると認識し、閉会式スピーチの依頼を取り下げた。チャンスに弱いピンチにも弱い私は、プレッシャーが取り払われたことを喜び、すっかり安堵していた。ところが実は閉会式の時点も私はまだ参加したままであり、それを知った事務局から、会期中

の昼休み、再度のスピーチを頼まれた。お世話になっている手前、引き受けはしたが、何の下準備も無く、いきなりのスピーチとなり、壇上では努めて平然を装ったが、実は緊張しきりだった。

### 日本人が参加する意義

ところで日本の研究成果は、中国の論文にあまり引用されることが無い。理由は簡単。翻訳が無いからである。だからこそ、こうした機会に乗り込んでゆき、ぜひとも広めたい研究成果を紹介してくるのが、日本研究者の使命ではなからうか。また、ひとたび学会で知り合いになっておけば、その後は抜き刷りを郵送したり、情報提供を求めたりする等、多方面での学術交流に発展することもある。意義はまことに深い。

学会後の食事でも、著名な先生に親炙できる至福の時間となる。著書を通じて感化されるだけだった懐れの先生と、実際にお会いし楽しく語り合えて、無上の喜びにひたれる。酒の味も格別だ。何日目



乾杯の音頭をとる陳尚君会長(右)と主催校の盧盛江教授(左)



筆者と趙昌平先生(中央)、葛喚音先生(右)

の宴席だったか、両隣が酒豪で鳴る教授に囲まれ、「Hāoyi、この一瓶を三人であけるぞ!」と言われたときも、飲を尽くし気がつけば、白酒を本当に三人で飲み干してしまった。願わくは、一斗の酒で論文百篇の書けることを。

#### 次回の開催地

学会は最終日に「参観考察」と称して、当地の観光地に皆で出掛けるのが通例である。実際これを楽しみに参加する研究者も多いのは、日中共通である。ただし今回は天津での学会であり、いつでも行けることもあって、私は早めに切り上げて参加しなかった。実は2年前の時点では、「次大会は新疆ウイグルで行われる」と発表され大いに楽しみにしていたが、国家レベルの学会だけに諸々の経緯が絡むらしく、天津へ変更となった。

次回2012年は、杜甫生誕1300年を記念して西安か、もしくは今回の予定地であった新疆のどちらかで開催されるそうだ。今度こそ楽しみにしよう。古都に遊び、わが杜甫が漂った気配を感じるもよし。あるいは果てしないシルクロードに思いをはせるもよし。いずれも異文化さきわう街である。まさに国際学会にふさわしいではないか。



# 国際中国語学学会第18回年次総会に参加して思うこと

愛知東邦大学 竹越 美奈子

2010年5月20日から22日までの3日間、国際中国語学学会第18回年次総会（IACL-18）が、第22回北米中国語学会（NACCL-22）と共同で、ボストンのハーバード大学で開催された。国際中国語学学会（略称はIACL。ホームページは<http://www.iacling.org>）は、92年に設立された学術団体で、中国語および中国語方言を対象とした科学研究の推進を目的としている。会員数は約400人で、国・地域別の内訳はアメリカ100人、台湾80人、中国50人、日本50人、フランス20人など（いずれも概数）となっており、日本の会員数はアメリカ、台湾に次いで多く、中国とほぼ等しい。全体の約12%を占めている。これまでの年次総会の開催地は、92年シンガポール国立大学、以下パリ、香港城市大学、ウィスコンシン大学、国立清華大学、ライデン大学、スタンフォード大学、メルボルン大学、シンガポール国立大学、カリフォルニア大学、愛知県立大学、南開大学、ライデン大学、台湾中央研究院、ニューヨーク、北京大学、パリである。

さて、今回の学会の研究発表は、基調講演、招待講演、若手奨励賞、一般発表の4部門に分かれて行われた。基調講演は「漢語方言中的歴史層次（丁邦新）」など4つ、招待講演は「幼児の北京語における否定とスコープのマーキング（李行徳）」、「辞彙、語法和認知的の表達（蔣紹愚）」、「關於構式義（陸儉明）」、「如何応用語言特点鑑別文本作者的異異



学会主会場（撮影：孟子敏）

（平田昌司）」など計10であった。

若手奨励賞（YSA）とは、Young Scholar Awardの略で、35歳以下でかつ現在の職位が准教授未満の会員に応募資格がある。ファイナリストに選ばれると、約500ドルの渡航助成金が支給されて、年次総会の若手奨励賞セッションでのプレゼンテーション審査を経て受賞者が決定する。IACLには他に学際的研究賞（Interdisciplinary Research Award、略称IRA）と橋本萬太郎賞があり、YSAの応募者は自動的にこれらの賞の選考の対象となる。今回は76件の応募の中から一次審査と二次審査を経て、最終的に4人がファイナリストに選ばれ、このセッションで競った。その結果、IRAに「シンガポール華語の声調システム（レスリー・リー）」と「中国語の関係節とコンテクスト（林千哲）」、橋本萬太郎賞に「自然音変与音変重建（鄭偉）」が選ばれた。09年の第17回総会では東京外国語大学大学院の張盛開氏がファイナリストの一人に残ったことがあるが、残念ながら日本からの応募者はあまり多くない。多くの若手研究者にこの賞のことを知ってほしいと思う。

一般の発表は「音韻論」「補語と修飾語」「社会言語学」「言語獲得」「語彙」「構文と意味」「音声論」「広東語の現在と過去」「歴史文法」「方言の文法と音韻」「台湾語、閩南語、客家語」「言語心理学」「モダリティと相互作用」など幅広い研究領域にまたがった計58の分科会があり、約650の応募の中から査読を経て選ばれた約200の口頭発表があった。発表言語は英語か中国語と決められており、プログラムのタイトルから判断すると、英語での発表が約6割、中国語が約4割のようだ。IACLは毎回英語による発表のほうが多い。06年に台北で開催されたときには、できるだけ英語で発表すること、どうしても無理ならせめて英文によるレジメを配布するという要望が出されたこともある。

次に会の運営であるが、シンプルかつ合理的でありながら、お得感があった。日本の学会でよくある

案内板、看板、発表者名と題目を書いた通称「めぐり」はない。タイムキーパーもパソコン担当者もない。空港出迎えも、中国の学会などでよくある観光ツアーもない。ボストンのように交通至便な大都市でこのような世話は必要ない。その代わりに、分科会の会場が工夫されていた。7つの分科会会場すべてが、ソファのある広い空間を囲むように配置されていたために、会場の移動がきわめてスムーズにできた。食事も受付もすべてこの空間にあったので、迷うことがない。そして、毎朝コンチネンタルの朝食、そして昼食がついた。ホテルなどで開催される場合を除き、朝食がつくことは珍しい。しかし朝食は有効だった。通常だと朝早く来てもすることがなくてポツリと会場に座っているだけであるが、朝食があるために早めに会場にやってくる人が多く、コーヒーを片手に談笑することもできるし、朝の第一分科会の出席者も多かったように思う。そもそもうれしかったのは、学会の名札を提示することで、ハーバード大学内の有料でハイレベルの博物館や美術館がすべてフリーパスになったことだ。(この美術館にあるゴッホとピカソのコレクションはすばらしかった。)参加費は当日会場で支払うと一般会員120ドル(当時のレートで約11,000円)、学生会員90ドル(同8,280円)だが、10日前までにインターネットで支払えば一般100ドル(同9,200円)、学生70ドル(同6,440円)であった。ほかに、ハーバード大学の名前入りの布製トートバッグがついた。

さて最後になるが、毎年気になるのは日本からの参加者が少ないことだ。予稿集によると今回所属が日本の大学等になっている人は遠藤雅裕、古川裕、平田昌司、Prashant Pardeshi、HSU Pei-Ling、



会員交流の場となったソファ (撮影: 孟子敏)

Masao Ochi、梁曉虹、孟子敏、申亜敏、望月圭子、岩田礼、Jun Yashima、吉川雅之の諸氏(予稿集掲載順、以下同)と筆者の14人で、全発表者252人(共著者を含む)のうちの5%にすぎない。同様に、09年のパリは、遠藤雅裕、遠藤智子、葛婧、平山邦彦、李貞愛、李冠賢、中西裕樹、任鷹、滕小春、王蓓淳、王英輝、楊曉安、吉川雅之、張盛開の諸氏と筆者の15人で全発表者250人中の6%である。前述のように、日本の大学等に所属する会員が全体の約12%であることを考えるときわめて少ない。その理由としてまず思い浮かぶのは以下の三点である。(1) 欧米の学年暦の関係で学会が開かれるのは例年5月から7月が多いが、日本の大学は休みではないので参加しにくい。最近では授業回数を1 Semesterあたり15週保証することが至上命令となっている大学も多く、休講にしにくい雰囲気もある。(2) 渡航費用がかかるため、常勤職に就職していない人や大学院生の場合、費用の捻出がむずかしい。もちろん、常勤職についても研究費があるとは限らないが。(3) 言語や研究風土の違いから、国際学会で発表するのは敷居が高いように感じてしまう。

しかしながら以上の三点は努力によって、あるいは多少無理をすることによって克服できる場合もある。日本からの参加が少ない本質的な理由は、日本の学界の内向きな文化にあるのではないか。つまり、日本の学界では、国外での口頭発表や雑誌に発表した論文があまり重視されない。また近年たとえば日本中国語学会の全国大会に参加する国外の研究者が増えているが、これに関しても学会内で快く思わない声もあると聞く。IACLのよい点は、多くの地域の人が参加していることである。そのため、研究領域が広く、自由で平等な雰囲気のもとで議論ができる。日本ではマイナーな研究分野であっても、ここならわかってくれる人が必ずいる。さまざまな人が参加しているので、いわゆる学界の重鎮とか序列にこだわらず、自由に議論ができる。堂々と発言する他国の若手研究者を見て勇気づけられたり、自分の力不足を痛感することもある。それと同時に、日本の研究レベルの高さを再認識することも多い。来年は天津で開催される予定である。書くべきことをきちんと書けば査読はパスできます。

(文中一部敬称略)



# 「百年中文」の学会に吹いた“DIY”の新風

——北京大学中国語言文学系主催「活在“現代”的“伝統”：国際博士研究生及青年学者專題研討会」に参加して

京都大学大学院 成田 健太郎

本年8月24日から26日の三日間、初秋の涼やかな風がようやく吹き始めた北京大学キャンパスにおいて、「活在“現代”的“伝統”：国際博士研究生及青年学者專題研討会」と銘打った学会が催された。主催者である北京大学中国語言文学系（以下中文系と略記）は、本年創立百周年を迎え、中文系の学生が「百年中文」のロゴ入りTシャツを着てキャンパスを闊歩する様はもはや見慣れた光景となっている。かく言う筆者も高級進修生として中文系に在籍しているのだが、情報に疎いせいで、無料配布期間内にこのTシャツにありつくことはできなかった。

さて、以下この会の概要を述べることにしたい。まず、主催者については北京大学中文系としているが、計画立案から会議の進行に至るまで、あらゆる実務を担ったのは中文系の研究生（大学院生）14名からなる会務組（実行委）であり、彼らをこそ主催者と呼ぶべきである。そして、彼らのうち最も経験のある二人の学生が統籌、すなわち発起人兼会務組のリーダーとして学生たちを牽引していた。筆者は今回小稿をものするにあたり、統籌の一人である陸胤氏（北京大学中文系中国古代文学專業直讀博士研究生）にインタビューし、学会運営の顛末について取材する機会を得た。取材を快諾してくれた陸氏にこの場を借りて謝意を表したい。

次に、この会は「北京大学2010年度博士生国際專



会場の様子

題研討会項目」の資金助成を受けている。このプログラムは、研究生が発起人となってテーマを選定し計画を立案する博士研究生及び博士後（ポスドク）による国際会議への助成制度である。前年度までは理工科系の院・系にこそ類似の制度があったが、文科系の院・系も応募できる制度となったのは本年度からであるという。助成の範囲は、会場費、資料費、宣伝費、参加者の宿泊費、飲食費の各項目にわたる充実ぶりである。ただし、助成の総額に上限がある関係で、遠来の参加者であっても交通費を支給することはできなかった。

統籌の陸氏は開会時の挨拶において、本会は北京大学中文系初の“DIY”学会であると宣言されたが、なるほどこのプログラムの主旨は学生の学会運営能力の向上にあり、学生の導師（指導教員）による学会運営への積極的干渉はそもそも想定されていない。選定されたテーマも学生の発案になるもので、申請にあたって必要となる三名の導師の仕事は、学生の案に承認を与えること、学生の身分では押さえにくい会場等に口を利くことといった、どちらかといえば学生の後ろ盾となる仕事である。会務組の学生たちが前面に出て主体的に工夫し、会の成功のために尽力する姿、そしてどことなく漂う手作り（DIY）感には、筆者も素直に好感を覚えた。

プログラムの助成を受けるためには、学会のテーマとその意義、会議の日程、参加者名簿、予算案等を詳細に記した申請書を北京大学研究生院に提出し、学内における選抜をくり抜かなければならない。この段の仕事は主に統籌の二人によって、本年の3月頃から始められた。北京に長期滞在している筆者が参加者候補として狙いをつけられたのもちょうどこの頃である。当初は開催時期を5月として計画し、参加予定者にも通知していたが、研究生院の審査にこのほか時間を要し、6月になってやっと助成許可を得たため、8月下旬の開催に大きくずれ込む結果となった。このために、当初の参加予定者が日程の都合で参加を取りやめたケースもあったそうである。

学会のテーマ「活在“現代”的“伝統”」は、上述のように学生の発案になるものであるが、そのねらいは一言でいえば「跨学科」である。北京大学中文系には、現代中国の標準的な時代区分観念に沿った「古代」「現代」「当代」文学の各専業があるが、各時代間の境界はもとより曖昧なものである。学会に参加した北京大学中文系の学生においても、現代文学専業の学生が大部分ではあるものの、たとえば統籌の陸氏は古代文学専業に所属し、専攻領域は「近代文学」であるという。そこで、「伝統」と「現代」についての従来の見方を相対化し、両者のつながりを再構築しようというのがテーマの意図である。また、細分化された各領域の若手研究者を広く呼び込もうというのも大きなねらいであり、有り体にいえば、主催者が学生の身分では参加者確保に困難を伴うことも十分考えられ、予め緩めにテーマを設定することはやむを得ないであろう。

参加者の選定については、まずは国際会議としての要件を満たすために、海外からの参加者を確保しなければならない。筆者はそのための最も手取り早い要員となったわけであるが、ほかにもつながりのある海外の大学の教員に学生を推薦してもらう形で参加者を確保し、国内の各地区についても同様の方法で参加者を集めたという。また、台湾からの自主的な参加申し込みもあり、さらに学内からは公告によって参加者を募り、結果、北京、上海、南京、香港、台湾、日本、シンガポールからの参加者が総勢25名に上った。参加者の大部分は中国近現代文学を専攻しており、東南アジアを含む東アジアからの参加者が全部を占めたのも不自然ではないが、助成獲得のためには地域的な偏りが不利に働くことも十分に考えられる。統籌はその点を見越してあえて逆手に取り、「東亜學術共同体」という視点を打ち出してアピールポイントにしたそうである。

予算案の出来不出来もプログラムの選抜において重要なファクターになるそうだが、会務組のメンバーの多くに学会運営補助の経験があり、学内のライバルに比べてより綿密周到な予算案を組むことができたという。

さて、以下は会議本番についての筆者の印象を少しく述べたい。会議は二日半、全七場の研究発表と、半日の円卓討論が組まれた。研究発表については、

発表内容も充実し、質疑応答も大変に活潑であった。また、各場に一名ずつ配された評議人（コメンテーター）には、中文系内外から四十歳代以下の壮青学者が多く招かれ、このような布陣も会議全体の帯びる若々しさには似つかわしいものであった。

円卓討論は、「活在“現代”的“伝統”」と「作為學術共同体的東亜」の二テーマが設けられた。予算と日程の関係で円卓のある会場が手配できず、通常の報告庁での開催となったのはいささか残念であったが、参加者の発言意欲の高さに筆者はただ舌を巻くばかりであった。ただ、あえて苦言を呈するならば、二つのテーマとも会議の主旨との整合性を最優先した感が否めない。このような大きいテーマは助成の申請においては受けが良いかもしれないが、専門家による学術的な討論のテーマとしては成立しにくく、参加者が各自の経験と感想を述べあう交流に落ち着いてしまったようにも思える。聞くところによれば、中文系では来年度以降もプログラムに応募して同様の学会を開くつもりだという。来年度以降の主催者には、討論の場となりやすいように工夫を加えてほしいところである。

会議進行において運営面のトラブルは特になく、計画段階からの道のりを振り返っても、困難といえれば助成獲得のための申請に係るものがほとんどであったそうである。これはひとえにこの助成制度自体が今年から始まったものであり、先例がないために誰にも加減が分からないという事情から来たものと思われる。来年度以降は本年度の経験を活かしてより円滑に準備を進めることができるであろう。最後に、初めての“DIY”学会を成功に導いた会務組の同学たちに祝意を表したい。



会務組一同(中文系正面向口にて)

## 金陵瑣言

京都大学大学院 村田 みお

南京の空は濁っている。塵なのかスモッグなのか、どういうわけかいつもぼんやりと白茶けている。かといってそれが陽光を遮るわけでもなく、夏には強い日射しが街路樹のプラタナスの下に濃い陰をつくる。2008年8月末、私は初めて南京の地を踏み、2010年7月まで約二年の日々を中国政府公費留学生として六朝古都で送った。その間には時に抜けるような青空もあったのだが、印象の中の空はいつも白濁している。

2008年北京オリンピック、2009年建国六十周年、2010年上海万博と、この三年は大きな祭典が続き、テレビや新聞を賑わせていたが、それらは全て対岸の火事のようなもので、私の南京大学での生活はいたって平穏であった。今回留学記を書く機会を与えられたので、思い返して心に浮かんでくるよきなし事を、とりとめなくではあるが綴ってみたい。

南から流れてきた長江は南京で東へと向きを変える。南京の街の西側と北側には長江が流れ、東側には明孝陵や中山陵を擁する紫金山が鎮座している。私のいた南京大学鼓楼校区はそんな街の中心部に位置する。この校区はそもそも金陵大学のキャンパスで、1952年に合併して南京大学とされた。ごく新しい建物が多い中で、正面の破風につけられた大きな紅い星の印象的な北大楼周辺の一画が往事の面影を留めている。また校内の片隅には前身である「両江師範学堂」と「金陵大学堂」の名を刻んだ碑があり、卒業の季節になると角帽とケープを身につけた卒業生たちがその前で記念撮影をする姿が見られる。この鼓楼校区では修士以上の院生が学んでおり、学部生がいるのは郊外の新しいキャンパスである。以前は長江大橋を渡った対岸の浦口校区だったが、先頃紫金山の東に新しく仙林校区が造られてそちらに移転した。

鼓楼校区は中央を東西に横切る漢口路を挟んで、大きく北苑と南苑の二つに分かれる。北苑は教育研究施設の区域で、各学部の校舎や図書館、体育館が立ち並

んでいる。早朝や夕方にはご近所のお年寄りがやってくる。太極拳やお喋りに興じている。約400mのトラックがある運動場では朝から晩までジョギングやウォーキングをする人の姿が絶えない。南苑は中国人学生の居住区域で、新旧さまざまな寮舎に加えて、四階建ての大きな食堂や共同浴場、理髪店がある。鼓楼校区に住む中国人学生の場合、修士で4～6人一部屋、博士でも3人一部屋と、他大学に比べて条件が悪いそう。空調のある図書館の机はいつも満席だし、空いている教室で勉強する人も多い。

外国人留学生は校区の北西端に位置する留学生寮に住む。隣の海外教育学院では留学生向けの現代中



南京大学の北大楼



南苑内の食堂

国語の授業を受けられる。高級進修生として哲学系に留学していた私は、専門の仏教、道教といった哲学系の科目を受講するとともに、海外教育学院の語学の授業にも出席した。私が受講した哲学系の授業は概ね演習形式で、古典文献を読んで討論する場合もあれば、与えられたテーマについて研究史をまとめたり、関連資料の目録を作る場合もあった。海外教育学院での語学クラスは五段階にレベル分けされており、いずれも読解と会話の授業を基本とするが、最上級のクラスでは時事問題や対外政策といった政治経済に関する科目、また日漢翻訳や書道、太極拳等も開講されており、バラエティに富む。

私は史跡名所巡りに熱心な方ではないので、二年も暮らしたわりに、中山陵や大屠殺記念館のような有名な場所にも行かなかったのだが、大学の周辺なら裏通りまで隈無く歩いた。日暮れ方には食事がてらく散歩に出た。南京の街は彼方此方が小さくなだらかに起伏している。歩いている時にはさして気にならぬ程度のごく緩やかな坂がほとんどだが、しばらく小さなアップダウンを繰り返すうち、いつの間にか足に疲れを感じる。大雨が降ると雨水が坂道流れ落ちてまるで川のようになるのは、排水が悪いのも一因だ。鼓楼校区の北苑一帯は実は小高い丘のような地形である。その丘の西に位置する留学生寮の前は特に低くなっているようで、俄雨がやって来ると周囲の雨水まで流れ込み、水をかぶって膝に達するほどになったから、そんな時は出入りに難儀した。散歩に出て夕立に遭い、帰ってくると門の前は一面の泥水、仕方なくまたぶらぶらとうろつき水が引くのを待ったこともある。

南京大学の西側ほど近くには南京師範大学がある。正門を入った所に「隨園」の名を刻んだ巨石が踞るこのキャンパスには、瓦屋根と紅い柱の校舎が並び、日が沈みオレンジ色に輝く外灯が点ると殊に風情がある。南京大学の北東端から街の中央を南北に貫く中山路に出ると、交差点には現在世界で七番目に高いという紫峰大廈が聳える。どこからでもよく見えるので方角を確かめるのに便利である。中山路を渡って東へしばらく歩くと東南大学。こちらの校内には樹齢千数百年という触れ込みの六朝松が生えている。といっても今ではほとんど枯死寸前、ワイヤー等で補強されて何とか立っているその姿は痛々しく見え

る。さらに北へ足を伸ばすと鶏鳴寺、台城、そして玄武湖が広がる。鶏鳴寺の門前には日本から贈られたという桜並木があり、花時には参拜客で賑わう。

2008年夏、南京に到着して間もなくの頃、ほんのりなことから渡し船で長江を渡り対岸にある廢駅を見に行った。地図で見るとその辺りの川幅は1.5kmほど、確か10分少々で向こう岸に着いたように思う。行き帰りに乗った船で初めて長江の川面を間近に見、その水の匂いを嗅ぎながら川風に吹かれたことは、私にとって印象的だったのだが、惜しむらくはその日の白っぽい薄曇りの空で、晴れた日にあらためて来たいと思った。あの空が南京の基準では「晴れ」に当たるのだと、後になって思った。

長江大橋から数km南には江心洲という大きな中洲がある。南京の街に寄り添うようにして南北に細長く伸びたその島にも矢張り渡し船で渡る。30分に一本の小型の渡し船を利用する人は存外に多く、毎便乗客で一杯になる。というのも南北の長さが10km近くあるというのに、橋といえば夾江大橋一本が架かっているきり、島の住民の足は相変わらず船に頼っているからである。地盤や交通の便の問題から未だ開発が進んでいない島内は農村そのもの、高層ビルの立ち並ぶ市街地と強いコントラストをなしている。島の主な農産物は葡萄で、例年7月から8月にかけて「葡萄節」が催され、南京大学付近の果物屋でも「江心洲葡萄」が並べられる。

南京では毎年12月13日午前10時になると街中にサイレンが鳴り響く。小半時も続くそのサイレンの音には、73年前の虐殺による死者への哀悼の意が込められている。この日は日本軍が南京を占領した日であり、大屠殺記念館では記念行事が執りおこなわれるそうである。サイレンは90年代から鳴らされるようになったらしい。最初に聞いた時は一体何事かと思った。後から友人に教えられた。

帰国してまだ日も浅いが、このように留学生生活を思いおこしていると、また南京が恋しくなってくる。次に訪れた際には高層建築がもっと増えているだろうし、今は2号線までしかない地下鉄路線に3号、4号が加わって、江心洲にまで通じているかもしれない。それでもきっと空は相変わらずぼうっと濁って、同じように白茶けたままだろう。

# 各種委員会報告

## [大会委員会]

委員長 竹村 則行

日本中国学会第62回大会は2010年10月9-10日、東広島市の広島大学で開催された。赤松林と葡萄畑が広がる丘陵地に移転して16年、風光明媚な広島大学で開催された大会は、5部会、59発表を擁した、多彩で内容に富む大会であった。

今年から新設された日本漢文部会も好評であった。大会参加者は両日で370名、懇親会参加者は約半数150名を数えた。先端研究の知見、友人知人との談話、“酒まつり”の舌鼓と、会員諸氏はそれぞれ秋の日を満喫したのであろう。

開催の庶務を担当された野間、市来両先生、関係各位に深甚の感謝を申し上げる次第である。

62回を迎えた学会大会だが、時の流れの中で様々な問題を抱える。多様の発表を擁し、開会閉会式にも多くの会員が参加したのは盛会の証であるが、実は学会全体は決して隆盛傾向ではない。

昨年も記したが、本会を含めて人文系の学会は同様の問題を抱える。背景には院生や教員数の減少があり、更にその背景には戦後日本の過度の欧米理系技術追従があり、従って人文系進路の減少や途絶がある。大会への会員の熱心な参加は、実は会員の学会への大きな期待を示している。

この期待に学会は応えているだろうか。池田理事長の主導下になされた日本漢文部会の新設や学生会費の値下げはその一環である。微増ながら会員数が増加したのは何より嬉しいが、学会の経済状態はなお厳しい。今後更に会員数が増えて学会運営が安定し、老壮青揃った研究発表や論文発表が保証され、日本中国学の全国組織としての学会が益々発展することを切望するものである。

次回第63回大会は2011年10月8-9日、福岡市の九州大学箱崎キャンパスで開催される。多くの会員が共に元気に集い、最先端の研究発表はもとより、中国学の現状や将来について存分に語り合い、共に絆を深めたい。

## [論文審査委員会]

委員長 土田 健次郎

『日本中国学会報』第62集の掲載論文編集についてはおおむね順調であった。

第63集の依頼論文は、次の会員を6月6日の理事会に推薦し、承認を得た。

哲学・思想部門 (評議員) 堀池 信夫  
(一般会員) 武田 時昌  
文学・語学部門 (評議員) 竹村 則行  
(一般会員) 荒木 猛

今年度は哲学・思想部門、文学・語学部門とも受賞者がいた。受賞者氏名、論文題目、授与理由は、第62集の彙報に掲載されている。なお日本学術振興会奨励賞推薦者は、該当者が無かった。

2010年度第1回委員会は大会時の10月9日に開催された。そこで以下のことが取り上げられた。

まず、不掲載論文に対する理由開示が議論された。本年6月6日の理事会で、理由開示の具体的実施についての検討を本委員会に付託することになり。それを受けての検討である。

この件に関しては、委員会開催に先立ってあらかじめ各委員から意見を寄せてもらい、それを参照しつつ委員会で討議した。その結果、今回出た意見をもとにさらに検討し、具体案を次回論文審査時まで固め、次回から実施するという方向となった。

また、『日本中国学会報』掲載論文について新漢字を許容するかどうかについて検討された。これは評議員会での議論を受けてのものである。その結果、必然性のある場合を考慮して、「論文執筆要領」の8に「印刷にあたっては全文を正漢字体(旧字)に統一する」とあるのを、「印刷にあたっては全文を原則として正漢字体(旧字)に統一する」と変更することになった。本「便り」とホームページに最新の「論文執筆要領」が掲載されているので、今後はこれに準拠されたい。

その他、次期会長の問題提起を受けて、現在の査

読者数の見直しなどが、議論された。また、編集担当校から、フロッピーが製造中止になるので、今後は掲載原稿を編集担当校に送付する時は従来の原稿とフロッピーではなく原稿とCD（または添付ファイル）にしてほしいという依頼があり、これを了承した。

今後の委員会は、次の日程を予定している。第2回委員会（在関東委員及び副委員長のみ、査読者・閲読委員の選定）は2011年1月30日（日）、第3回委員会（第63集掲載論文・第64集依頼論文執筆者・学会賞候補者・学術振興会奨励賞推薦者の選定、等）は2011年3月27日（日）。

## [出版委員会]

委員長 富永 一登

出版委員会は、『日本中国学会報』（10月刊）と「学会便り」（4月と12月の年2回刊）の刊行を担当しています。今年の『日本中国学会報』第62集の編集担当校は神戸大学（釜谷武志委員）です。論文審査委員会、事務局、モリモト印刷と随時連絡を取りながら、5月から9月まで、その任に当たってもらっていました。今回は学会展望の目録をホームページに移したことにともない、展望・彙報・会則・執筆要領を横組み常用漢字体とするという大幅な改変を行いましたが、ご苦労の甲斐あって、無事に大会開催前に会員のお手元に届けることができました。改変についてのご意見ご要望があれば、学会本部または委員会にお寄せ願います。来年度から2年間は名古屋大学（加藤国安委員）の担当です。

『日本中国学会報』に掲載されている学界展望は、哲学・文学・語学の各部門の執筆担当校に展望記事と目録の原稿をお願いしています。今年と来年の哲学部門の担当校は、京都大学（池田秀三委員）です。文学部門は、今年がお茶の水女子大学（和田英信委員）で、来年から2年間は大阪大学（浅見洋二委員）の担当となります。語学部門は、今年と来年は関西大学（内田慶市委員）です。

学界展望の原稿は、出版委員会で読み合わせをして、その意見を踏まえて加筆修正したものを『日本

中国学会報』に掲載することになっています。今年は、7月31日（土）に京都大学文学研究科小会議室をお借りし、川合康三副理事長にも出席していただき、委員会を開催しました。

業績目録は展望担当校の尽力で作成していますが、会員の自己申告数が増えれば、遺漏も少なくなると思います。部門別に自己申告用のアドレスを作って学会のホームページでも受け付けることにし、本号の「学会便り」に、案内を掲載しています。なお、4月号に掲載する「国内学会消息」の原稿に関する案内も掲載していますので、あわせてご協力よろしくお願いします

科研の採択状況は、学振のホームページを参照していただくことにし、12月発行の「学会便り」には掲載しないことにしました。

「学会便り」掲載の記事は、各委員を通して原稿依頼を行っています。編集は、本号と来年4月号を平田昌司副委員長が担当します。「学会便り」に掲載を希望される場合は、各委員にご連絡いただければ幸いです。会員のみなさまの投稿をお待ちしています。

## [選挙管理委員会]

委員長 神塚 淑子

本年度は会則第11条にもとづき、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙がそれぞれ以下の日程で行われました。それぞれの結果につきましては、別途公表しておりますのでここでは記載しません。

### 1. 評議員選挙

平成22年6月5日（土）二松学舎大学において投票用紙発送業務、7月3日（土）同大学において開票。

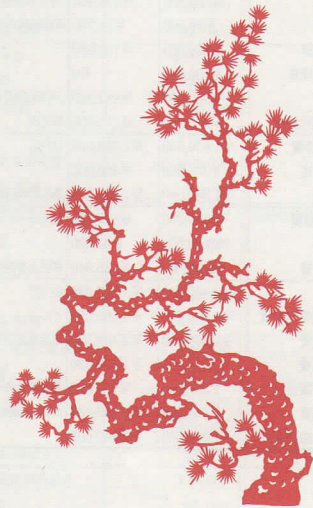
### 2. 理事長選挙

平成22年7月10日（土）名古屋大学において投票用紙発送業務、8月7日（土）斯文会館において開票。

### 3. 監事選挙

平成22年10月8日（金）広島大学で行われた次期評議員会において投票および開票。

評議員選挙の投票率を高めるために、平成20年10月の理事会と評議員会において、選挙規約を改正することが決まりました。改正の内容は、これまでの選挙規約では「10名を連記」とあったのを、「10名以内を連記」に変更するというものでした。選挙管理委員会では、10名以内の連記に変わったことを会員の皆様に周知するために、「学会便り」を通じて繰り返しお伝えしてまいりました。今回の評議員選挙は選挙規約改正後の初めての選挙であり、前回と比べてどのような変化が見られるか注目されたわけですが、結果は、前回の選挙と比べて、投票率は0.8%の増加、投票総数も前回より増加しました。投票用紙に9名以下の名前を記載していた場合、これまでは全体が無効になっていたのですが、今回は9名以下でも有効となり、そのために救われた投票者の数は全投票者数の約1割ありました。この結果から見て、10名以内の連記に規約改正したことは、投票率・投票総数の向上のために一定の成果を挙げたと言えると思います。しかし、全体から見れば、投票率はまだまだ低い状態にあり、なお一層の工夫が必要です。会員の皆様のご協力をお願いいたします。



# 日本中国学会 平成21年(2009)度 収支決算書

平成21年(2009)4月1日～平成22年(2010)3月31日

(単位:円)

科 目	予 算	決 算	摘 要	差 額
収入の部				
1. 前年度繰越	¥7,022,490	¥7,022,490		¥0
2. 会員会費	¥12,000,000	¥10,387,521		¥-1,612,479
3. 寄付金	¥1,000,000	¥947,150		¥-52,850
4. 預金利息	¥3,000	¥1,851		¥-1,149
5. 著作権料分配金	¥0	¥24,000		¥24,000
総 計	¥20,025,490	¥18,383,012	(A)収入総計	¥-1,642,478

科 目	予 算	決 算	摘 要	差 額
支出の部				
1. 事務局総務費	¥2,730,000	¥2,435,227	(1)～(7)	¥294,773
(1)印刷費	¥1,250,000	¥1,223,875	「便り」封筒印刷費を含む	¥26,125
(2)通信費	¥600,000	¥616,405	「便り」発送費を含む	¥-16,405
(3)交通費	¥70,000	¥19,760	事務局補佐員交通費等	¥50,240
(4)消耗品費	¥200,000	¥153,262		¥46,738
(5)庶務処理費	¥100,000	¥0		¥100,000
(6)雑費	¥300,000	¥211,925	うち振込手数料¥123,350	¥88,075
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,860,000	¥1,783,520	(1)(2)	¥76,480
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,500,000	¥1,423,520	事務局補佐員謝金等	¥76,480
3. 事務局会議費	¥400,000	¥559,239	(1)(2)	¥-159,239
(1)会議費	¥100,000	¥93,299		¥66,701
(2)役員旅費	¥300,000	¥525,940	第1回及び第4回理事会	¥-225,940
4. 事業費	¥6,400,000	¥5,882,088	(1)(2)	¥517,912
(1)学会報等刊行費	¥5,200,000	¥4,682,088	イ～ニ	¥517,912
イ. 印刷費	¥2,800,000	¥2,403,108	学会報及び名簿	¥396,892
ロ. 編集費	¥1,600,000	¥1,600,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥273,000	英文要旨作成	¥27,000
ニ. 発送費	¥500,000	¥405,980	モリモト印刷業務委託等	¥94,020
(2)学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0

科 目	予 算	決 算	摘 要	差 額
5. 各種大会委員運営費	¥2,070,000	¥1,440,086	(1)～(7)	¥629,914
(1)大会委員会	¥55,000	¥35,530		¥19,470
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥40,000	¥30,530		¥9,470
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥610,000	¥574,840		¥35,160
イ. 通信費	¥180,000	¥90,340		¥89,660
ロ. 会議・旅費	¥350,000	¥412,412		¥-62,412
ハ. 謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥12,088		¥7,912
(3)出版委員会	¥400,000	¥259,710		¥140,290
イ. 通信費	¥30,000	¥14,560		¥15,440
ロ. 会議・旅費	¥250,000	¥134,940		¥115,060
ハ. 謝金	¥30,000	¥30,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥80,000	¥80,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥210		¥9,790
(4)選挙管理委員会	¥65,000	¥20,160		¥44,840
イ. 通信費	¥5,000	¥160		¥4,840
ロ. 会議・旅費	¥30,000	¥0		¥30,000
ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥0		¥10,000
(5)研究推進・国際交流委員会	¥70,000	¥20,000		¥50,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥0		¥50,000
ハ. 謝金	¥10,000	¥20,000		¥-10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(6)将来計画特別委員会	¥290,000	¥160,939		¥129,061
イ. 通信費	¥5,000	¥620		¥4,380
ロ. 会議・旅費	¥250,000	¥139,929		¥110,071
ハ. 謝金	¥30,000	¥20,000		¥10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥390		¥4,610
(7)ホームページ特別委員会	¥580,000	¥368,907		¥211,093
イ. 通信費	¥5,000	¥6,670		¥-1,670
ロ. 会議・旅費	¥55,000	¥51,380		¥3,620
ハ. 謝金	¥20,000	¥120,000		¥-100,000
ニ. ホームページ管理費	¥500,000	¥190,857		¥309,143
1～5 予備費	¥13,460,000	¥12,100,160	支出費目としては計上しない	¥1,359,840
合 計	¥20,025,490	¥12,100,160	(B)支出合計	¥7,925,330
次年度繰越金	-	¥6,282,852	(A)収入総計-①支出合計	
総 計	¥20,025,490	¥18,383,012		¥1,642,478

## 学会基金

収 入	基 本 金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥870,821	
預金利息	¥3,888	
信託収益金	¥2,528	
合 計	¥877,237	

支 出	基 本 金	¥4,300,000
日本中国学会費	¥0	
次年度繰越金	¥877,237	
合 計	¥877,237	

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

平成22年5月18日  
日本中国学会監事

安 藤 信 廣  
大 木 康  
加 藤 敏



# 日本中国学会 平成22年(2010)度 予算書

平成22年(2010)4月1日～平成23年(2011)3月31日

(単位:円)

収入の部	科目	予算	摘要
	1.前年度繰越	¥6,282,852	
	2.会費	¥11,000,000	
	3.寄付金	¥1,000,000	
	4.預金利息	¥3,000	
	5.著作権料分配金	¥0	
合計	¥18,285,852		

支出の部	科目	予算	摘要
	1.事務局総務費	¥2,430,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥950,000	「便り」・封筒・投票用紙等を含む
	(2)通信費	¥750,000	「便り」・投票用紙等発送を含む
	(3)交通費	¥20,000	
	(4)消耗品費	¥100,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	
	2.事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐謝金を含む
	3.事務局会議費	¥630,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥30,000	
	(2)役員旅費	¥600,000	年度末引継理事会旅費を含む
	4.事業費	¥6,700,000	(1)(3)
	(1)学会報等刊行費	¥4,300,000	イ～ニ
	イ.印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
	ロ.編集費	¥1,600,000	
	ハ.翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
ニ.発送費	¥400,000		
(2)学術大会運営費	¥1,200,000		
(3)若手シンポジウム運営費	¥1,200,000		

支出の部	科目	予算	摘要
	5.各種大会委員運営費	¥1,510,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥35,000	
	イ.通信費	¥5,000	
	ロ.会議・旅費	¥20,000	
	ハ.謝金	¥5,000	
	ニ.消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥680,000	
	イ.通信費	¥100,000	
	ロ.会議・旅費	¥400,000	
	ハ.謝金	¥60,000	
	ニ.消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥280,000	
	イ.通信費	¥15,000	
	ロ.会議・旅費	¥150,000	
	ハ.謝金	¥30,000	
	ニ.学会便り編集費	¥80,000	
	ホ.消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥310,000	改選年度
	イ.通信費	¥10,000	
	ロ.会議・旅費	¥250,000	
	ハ.謝金	¥40,000	
	ニ.消耗品・雑費	¥10,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥25,000	
	イ.通信費	¥5,000	
	ロ.会議・旅費	¥5,000	
	ハ.謝金	¥10,000	
ニ.消耗品・雑費	¥5,000		
(6)将来計画特別委員会	¥50,000		
イ.通信費	¥5,000		
ロ.会議・旅費	¥30,000		
ハ.謝金	¥10,000		
ニ.消耗品・雑費	¥5,000		
(7)ホームページ特別委員会	¥230,000		
イ.通信費	¥5,000		
ロ.会議・旅費	¥5,000		
ハ.謝金	¥160,000		
ニ.ホームページ管理費	¥60,000		
1～5	¥12,830,000		
予備費	¥5,455,852		
合計	¥18,285,852		

## 学会基金

収入の部	基本金	¥4,300,000
	前年度繰越金	¥877,237
	預金利息	¥3,000
	信託収益金	¥2,000
	合計	¥882,237

支出の部	基本金	¥4,300,000
	日本中国学会費	¥160,000
	次年度繰越金	¥722,237
	合計	¥882,237

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

# 学界展望へのご協力をお願い

『日本中国学会報』には、毎冊、「学界展望」が掲載され、またその基礎資料となる文献目録が学会ホームページに載せられています。これは編集担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆されたご本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号、第63集（2011年10月刊行予定）には、2010年（平成22年）の文献目録を掲載します。2010年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、すでに2006年から郵便によるご報告は廃止しておりますので、電子メールでのみお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

[哲学部門] 池田 秀三 会員（京都大学）  
電子メール：ssj.tetsugaku@gmail.com

[文学部門] 浅見 洋二 会員（大阪大学）  
電子メール：ssj.bungaku@gmail.com

[語学部門] 内田 慶市 会員（関西大学）  
電子メール：ssj.gogaku@gmail.com

○アドレスは学会展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。

各部門の分類は以下の通りです。

- 哲学部門
- 一、総記
  - 二、先秦
  - 三、秦・漢
  - 四、魏・晋・南北朝
  - 五、隋・唐

- 六、宋・金・元
- 七、明・清
- 八、近現代
- 九、琉球・朝鮮
- 十、日本
- 十一、書誌学
- 十二、その他

- 文学部門
- 一、総記
  - 二、先秦
  - 三、漢・魏・晋・南北朝
  - 四、隋・唐・五代
  - 五、宋
  - 六、金・元・明
  - 七、清
  - 八、近現代
  - 九、民間文学・習俗
  - 十、日本漢文学
  - 十一、比較文学
  - 十二、書誌

- 語学部門
- 一、総記
  - 二、文字・訓詁
  - 三、音韻
  - 四、語彙
  - 五、語法
  - 六、方言
  - 七、教育・学習（教科書は含みません）

○国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

## 新役員一覽

理事長	川合 康三			
副理事長	堀池 信夫	牧角 (竹下) 悦子		
理事	赤井 益久 神塚 淑子 土田健次郎 平田 昌司	吾妻 重二 佐藤鍊太郎 富永 一登 藤井 省三	釜谷 武志 竹村 則行 花登 正宏 渡邊 義浩	
監事	阿川 修三	市川 桃子	内山 精也	
評議員	赤井 益久 吾妻 重二 池田 秀三 市来津由彦 内山 精也 大島 晃 垣内 景子 門脇 廣文 川合 康三 金 文京 後藤 秋正 坂元ひろ子 静永 健 高木 重俊 戸倉 英美 野間 文史 藤井 省三 牧角 (竹下) 悦子 松原 朗 向嶋 成美 渡邊 義浩	阿川 修三 安藤 信廣 池田 知久 井波 律子 大上 正美 岡崎 由美 加藤 国安 釜谷 武志 稀代麻也子 合山 究 小松 建男 佐竹 保子 柴田 篤 竹村 則行 富永 一登 花登 正宏 古屋 昭弘 三浦 國雄 吉田 公平	浅見 洋二 井川 義次 市川 桃子 謡口 明 大木 康 尾崎 文昭 加藤 敏 神塚 淑子 木津 祐子 小島 毅 小南 一郎 佐藤鍊太郎 白水 紀子 土田健次郎 中嶋 隆藏 平田 昌司 堀池 信夫 松浦 恆雄 三浦 秀一 吉田 純	
顧問	荒木 見悟 岡村 繁 興膳 宏 町田 三郎	石川 忠久 加地 伸行 戸川 芳郎 村山 吉廣	今鷹 真 楠山 春樹 福井 文雅 山下 龍二	
幹事	宮本 徹	和田 英信		

## 平成22年度会員動向

### ●会員動向 (平成22年10月25日現在)

総会員数1,905名、準会員58機関、賛助会員11社

### ●物故会員 (「学会便り」本年度第1号発行以後、10月25日現在) 6名

関東地区 檜垣 馨二

溝口 雄三

近畿地区 伊藤 富雄

中垣内清貴

島 一

中国四国地区 市村金次郎

(敬称略)

### ●退会会員

○退会申出会員 (第1回、第3回理事会承認分) 6名

伊東 一成 大島 正二 大野 修作

久保田美年子 古川 末喜 横澤 泰夫

○4年会費未納による退会会員 38名

### ●住所不明会員 28名

一関留美子 伊藤 丈 高 倩藝

古城 広恵 杉浦 等 山谷 悦子

鷹橋 明久 玉野井純子 鄭 麗芸

新島 翠 原 貴史 樋口 勝

宮野 直也 榎 高志 村上 嘉英

山崎みどり 吉田千奈美 羅 党興

劉 柏林 中山 至 暢 素梅

鈴木 康予 安部 史絵 林 柗

内山喜代成 蔡 麗玲 高橋 佑太

宮内 四郎

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください (メールアドレス: ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp)。

日本中国学会評議員会 平成22年10月8日確定

# 平成22年度新入会員一覧

10月8日開催の評議員会で 入会が承認されたのは、以下の通りです。

## ●通常会員 26名

阿部 幹雄	関東地区	一橋大学
新田 元規	関東地区	東京大学 (非)
石橋 賢太	関東地区	中央大学 (院)
王 艶珍	中部地区	名古屋大学 (院)
小野 泰教	関東地区	東京大学 (院)
金子 久夫	近畿地区	京都大学 (院)
姜 智恩	関東地区	東京大学 (院)
韓 玲姫	関東地区	筑波大学 (院)
許 司未	関東地区	一橋大学 (院)
喬 玉鈺	近畿地区	奈良女子大学 (院)
近藤 徹	九州地区	大阪市立大学大学院修士課程修了
崔 琦	中部地区	名古屋大学 (候補研究員)
申 緒璐	国外	復旦大学 (院)
田尻 尚文	関東地区	中央大学 (院)
田中 有紀	関東地区	東京大学 (院)
譚 明珠	九州地区	九州大学 (院)
陳 曉傑	近畿地区	関西大学 (院)
独孤 嬋霓	関東地区	横浜国立大学 (院)
中野 徹	北海道地区	北海道大学 (院)
羽田 朝子	近畿地区	奈良女子大学
平澤 歩	関東地区	東京大学 (院)
福嶋 亮大	近畿地区	京都大学 (非)
山本 浩史	近畿地区	京都大学 (院)
楊 韜	中部地区	名古屋大学 (院)
李 麗君	九州地区	九州大学
劉 海燕	中部地区	名古屋大学 (院)

## ●賛助会員 2社

勉誠出版 (株)  
(株) 大学教育出版

なお、以下の方々については6月及び7月に開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の名簿に記載されています。

## ●通常会員 61名

石谷 泰枝	石原 伸一	稲富 雄亮
于 甲春	大兼 健寛	大島 絵莉香
小田切文洋	梶田 祥嗣	蟹江 静夫
川邊 雄大	雁木 誠	北村 光広
許 時嘉	金城 未来	栗山 雅史
小池 直	高 芳	後藤 昭雄
坂崎 由明	佐々木雷太	佐藤 信一
椎木 伸治	四方美智子	白石 尚史
城山 拓也	菅原 悟	鈴木 俊哉
住吉 朋彦	諏訪原 研	竹下 大輔
田中 洋子	谷口 孝介	種村由季子
田村有見恵	陳 文佳	辻井 義輝
鄭 月超	唐 焯	東條 智恵
土佐 朋子	中丸 貴史	西川 幸宏
丹羽 博之	布村 浩一	沼田 卓美
野口 拓也	白 高娃	長谷川真史
林 佳恵	原 信太郎	アレシャンドレ
細川 直吉	前原あやの	松尾むつ子
松下 道信	森 雅子	柳澤 良一
山口 要	山口 謡司	山野 清二郎
山谷 紀子	渡邊 賢一	

# 学生会員の会費値下げについて

事務局

去る10月8日に開催された今年度第2回理事会の議を経て、同日開催の今年度評議員会において、国内外の大学・大学院・研究機関等に正規学生として在籍している会員（以下「学生会員」と称す）の会費を、来年度（2011年度）以降、年額4,000円に減額することが決定されました。

これに伴い、会員各位におかれましては会費納付の際に以下の点にご注意いただくとともに、格別のご協力をお願い申し上げます。

- (1) 学生会員の認定は、請求書作成時点での事務局登録データに基づき行うこととなります。身分変更が生じた場合には、可及的速やかに事務局までお届けいただきますようお願い申し上げます。
- (2) 2011年度分の会費請求は、2011年4月15日現在の登録データを基に行います（予定）。特に今年度末で学籍を離れる予定の会員の皆さんは、必ず4月11日（月）までに事務局へ所属機関の変更をお届けください。
- (3) 学籍を有しないことが判明した場合は、過去に遡及して普通会员としての会費（7,000円）を徴収することもあり得ますので、ご所属の届け出は確実にお願い申し上げます。
- (4) 学生会員の会費が4,000円となるのは2011年度請求分からとなります。2010年度以前の会費未納分については減額されることはありません。
- (5) 学生会員の要件等についてご不明の点がございましたら、事務局までお問い合わせください。
- (6) 学生会員制度の発足に伴い、来年度以降、毎年「登録データ確認書」（仮称）を各会員に送付し、現住所・所属等の登録データ確認の徹底を行いたいと考えております。会員各位のご協力をお願い申し上げます。

## 【参考】「日本中国学会会則」新旧対照表

（※下線部が改正点。関連箇所のみ抜粋）

新 会 則	現 行 会 則																						
<p><b>会 則</b> 第4条（会員の名称）本会の会員は次の7種とする。</p> <p>1. 通常会員 普通会员と学生会員と特別会員とがある。 <u>学生会員とは大学・大学院・研究機関等に正規学生として在籍しているもの。</u> <u>特別会員とは会員歴30年以上で前年度内において満80歳に達したもの。</u></p> <p>2. 賛助会員 3. 国外会員 4. 客員会員 5. 準会員</p> <p><b>第8条（会費）</b> 1. 会員は下記会費を年度始めに納入するものとする。 2. ただし顧問・客員会員および特別会員はこれを免除する。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">通常会員</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">普通会员</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;"><u>学生会員</u></td> <td style="text-align: right;"><u>4,000円</u></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">賛助会員</td> <td style="text-align: right;">1口(10,000円)以上</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">国外会員</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">準会員</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> </table> <p><b>付 則</b> 1. 本会は事務所を当分の間、東京都文京区湯島1丁目4番25号斯文会館に置く。 2. 本会則は昭和24年10月22日より施行する。 （中略） 平成18年4月1日改正 <u>平成23年4月1日改正（予定）</u></p>	通常会員		普通会员	7,000円	<u>学生会員</u>	<u>4,000円</u>	賛助会員	1口(10,000円)以上	国外会員	7,000円	準会員	7,000円	<p><b>会 則</b> 第4条（会員の名称）本会の会員は次の6種とする。</p> <p>1. 通常会員 普通会员と特別会員とがある。  特別会員とは会員歴30年以上で前年度内において満80歳に達したもの。</p> <p>2. 賛助会員 3. 国外会員 4. 客員会員 5. 準会員</p> <p><b>第8条（会費）</b> 1. 会員は下記会費を年度始めに納入するものとする。 2. ただし顧問・客員会員および特別会員はこれを免除する。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">通常会員</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">普通会员</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">賛助会員</td> <td style="text-align: right;">1口(10,000円)以上</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">国外会員</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 40px;">準会員</td> <td style="text-align: right;">7,000円</td> </tr> </table> <p><b>付 則</b> 1. 本会は事務所を当分の間、東京都文京区湯島1丁目4番25号斯文会館に置く。 2. 本会則は昭和24年10月22日より施行する。 （中略） 平成18年4月1日改正</p>	通常会員		普通会员	7,000円	賛助会員	1口(10,000円)以上	国外会員	7,000円	準会員	7,000円
通常会員																							
普通会员	7,000円																						
<u>学生会員</u>	<u>4,000円</u>																						
賛助会員	1口(10,000円)以上																						
国外会員	7,000円																						
準会員	7,000円																						
通常会員																							
普通会员	7,000円																						
賛助会員	1口(10,000円)以上																						
国外会員	7,000円																						
準会員	7,000円																						

# 事務局からのお知らせ

## 彙報

第1回理事会（6月6日開催）での決定事項を受け、6月11日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

- ・平成22年度日本中国学会賞受賞者の決定について  
[哲学・思想部門]齊藤正高 「『物理小識』の脳と心」  
[文学・語学部門]船越達志 「巧姐の「忽大忽小」と林黛玉の死——『紅樓夢』後四十回の構想考——」
- ・新入会員の決定について  
通常会員49名（3月29日開催の平成21年度第4回理事会承認分を含む）の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

持ち回り理事会での決定事項を受け、7月26日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

- ・新入会員の決定について  
通常会員13名（和漢比較文学会会員）の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

また、10月8日開催の今年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

### [報告事項]

- ・理事長による会務報告
- ・平成23・24年度評議員・理事長選挙の結果報告
- ・平成23・24年度副理事長・理事の委嘱について
- ・平成23・24年度監事選挙の結果報告
- ・会員動向について
- ・学会報編集担当校・学会展望担当校・大会開催校について  
学会報編集担当校 名古屋大学

学会展望編集担当校 哲学／京都大学  
文学／大阪大学  
語学／関西大学  
学術大会開催校 九州大学  
(平成23年10月8日[土]～9日[日])

- ・各種委員会報告

### [審議事項]

- ・平成21年度決算報告・監査報告
- ・平成22年度予算案について
- ・新入会員の承認
- ・「学生会員の会費値下げの提案」について
- ・第62回学術大会総会次第について

翌10月9日の総会において、評議員会の議決事項が報告された。

### ◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2カ年（平成21・22年度）未納の方には、本年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。また、来年度から学生会員の制度が創設されますので、併せてご注意ください（29頁参照）。

郵便振替口座：00160-9-89927

### ◎退会の通知、住所等の変更について

退会ならびに住所・所属機関等に変更が生じた際は、速やかに事務局までご通知ください。通知は郵便・ファックスまたは電子メールにてお願いいたします。

メールアドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp

## 「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行の「学会便り」に掲載することになっています。

2010年1月から12月までに開催されました国内学会の原稿は、来年（2011年）2月末日までに、下記宛にE-mailでお送りください。入力していただいたものをそのまま印刷します。校正はありません。この点、あらかじめご承知くださるようお願いします。

chubun.kyoto@gmail.com（「学会便り」編集用アドレス）  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室  
平田 昌司

---

## 「研究会等開催の案内」記事募集

「学会便り」には、会員の参加が予定される各種研究会等の案内を掲載いたします。

- ・1月から4月に開催される予定のものは、12月発行の「学会便り」に、
  - ・5月から12月に開催予定のものは、4月発行の「学会便り」に、
- 掲載します。研究会等の開催を計画されている場合は、研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などを、上記アドレスにお知らせ願います。

なお、この「研究会等の開催案内」は、学会のホームページにも掲載することにしていきますので、是非ご利用願います。

## 科学研究費補助金採択状況の 不掲載について

従来、毎年12月発行の学会便りで科学研究費の採択状況をお知らせしておりましたが、国立情報学研究所の“KAKEN 科学研究費補助金データベース”によって容易に検索できるようになっていることにかんがみ、今年度から不掲載とすることになりました。同データベースについては、下記のURLをご参照ください。

<http://kaken.nii.ac.jp/>

上記の措置とあわせて、新たに国内外の学界動向を紹介したエッセイを充実させることにいたしました。



## 「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

## 応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

## 使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

## 原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

## 体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として正漢字体（旧字）に統一する。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分

の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

## 論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

## 原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。  
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25  
斯文会館内 日本中国学会
14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

## 校 正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

## 抜 刷

18. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

## そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。  
(昭和62年10月11日制定)  
(平成13年5月13日修正)  
(平成14年10月13日一部修正)  
(平成15年10月5日一部修正)  
(平成19年10月7日一部修正)  
(平成20年5月17日一部修正)  
(平成21年10月11日一部修正)  
(平成22年6月6日一部修正)  
(平成22年10月10日一部修正)